

【宝登山神社】

宝登山神社は、秩父の北に位置する宝登山にあり、秩父三社の一つである。言い伝えによると、西暦 110 年、国民的英雄である日本武尊が、激しい火事から命を救われたことにちなんでこの神社を創建した。

日本武尊は、日本の伝説上の第十二代天皇である景行天皇のご子息であった。日本武尊は、現在の奈良県で強い勢力を持っていた大和朝廷の命を受け、東北地方平定のために派遣されていた。その帰りに、皇子とその家臣が宝登山の近くを通ったのだが、皇子は宝登山に登ることにした。山に登る途中、彼らは突然の山火事に巻き込まれた。彼らに命の危機が迫ったとき、黒と白のオオカミがどこからともなくやってきて、火を消したという。オオカミは皇子とその家臣を山頂に導き、現れたときと同じく神秘的に消えていった。

日本武尊は、オオカミが神の使者であったとき気づき、感謝を捧げるため山頂に神籬を立てた。彼はここに、日本の最初の天皇と言い伝えられている神武天皇と神道における山神の一人である大山祇神、そして神道における火神である火産霊神を祀った。

日本武尊は、奇跡的に命を救われたことにちなんで、この山を「火（ホ）」と「止（ド）」の文字で「ホド」と名付けたが、その数世紀後に二度目の奇跡が起こったことから、それらの文字は変更された。弘仁天皇の時代（西暦 810～824 年）に、光輝く神聖な宝石（宝珠の玉）が山上に飛翔するのが見られたのである。このことにちなんで、「ホド」という名前は、現在の名前である「宝（ホ）」と「登（ド）」と書かれるようになった。

12 世紀に、仏教僧である空圓（1121 年没）が、山のふもとに玉泉寺を建立した。その寺はやがて既存の神社境内に組み込まれ、神道と仏教の山岳修行が融合された。神道神を仏教の仏の仮の姿と見なすこのような崇拝様式は、日本全体で何世紀も続いた。それは、明治時代（1868～1912 年）の新しい国家政策により、仏教と神道のすべての施設と慣行の分離が命じられた 1868 年まで続いた。

現在、神社の境内は宝登山のふもとにある。拝殿、本殿および幣殿は、H 字型にレイアウトされており、権現造りとして知られる建築様式である。見事な彫刻を含む現在の建物は、改修工事が終了した 1874 年にさかのぼる。彫刻には、「二十四孝」（拝殿右側の欄干）や「西王母」（本殿の欄干）といった中国神話の人物のほか、龍や鶴などの縁起の良い動物が描かれている。

奥宮は、山頂に日本武尊が創建した場所に残っている。ここに祀られている神々を参詣したい場合は、徒歩で約 1 時間、または境内のすぐ外にあるケーブルカーに乗って行くことができる。

毎年 100 万人以上の参拝者が宝登山神社を訪れている。神々への祈りは、火事やその他の災害除けに特に効果的であると考えられているが、人々は、家内安全、学業成就や商売繁盛、交通安全や盗難除けも祈願する。毎年恒例の祭りである例大祭は 4 月 3 日に行われ、その他の祭りは年間を通じて行われる。